

まえがき

今日のラテンアメリカ諸国の多くは、深刻な経済危機にある。累積債務問題とともに、激しいインフレーションに直面している。従来ラテンアメリカ諸国は慢性的なインフレーションを経験してきたが、1980年代に入り多くの諸国でインフレ率は一様に加速し、これまでにない高いインフレ率となっている。このため、いくつかの国でハイパー・インフレ（超インフレ）が出現し、経済は著しく混乱している。このようなインフレーションに対し、多様な安定化政策が実施されてきたが、いずれも失敗に帰しているか、深刻な問題を残しているといつて過言ではない。ラテンアメリカの80年代は「失われた10年」と呼ばれているが、90年代に経済成長と社会的公正の回復を実現するためには、誕生間もない多くの民主政権にとってこのインフレ問題の解決は最大の課題である。

本書は、アジア経済研究所の中南米総合研究事業の一環として平成元年度に実施された「ラテンアメリカの経済安定化政策研究会」の成果の一部である。研究会のメンバーは以下のとおりである。主査：西島章次（神戸大学経済経営研究所）、幹事：浜口伸明（アジア経済研究所）、委員：加賀美充洋（アジア経済研究所）、石黒馨（阪南大学）、小倉明浩（滋賀大学）、オブザーバー：小坂允雄（アジア経済研究所）、小池洋一（アジア経済研究所）、宮島茂紀（アジア経済研究所）、Roberto Macedo（サンパウロ大学）。

研究会は、ラテンアメリカのインフレーションと安定化政策について、とくにアルゼンチン、ブラジル、ボリビア、チリ、メキシコの5カ国を対象とし、理論的、実証的な研究を目的とするものであった。各メンバーがそれぞれ

れの国に特化して研究が進められたが、本書にみられるように、各メンバーにはそれぞれ異なる見解があり、本書の課題に対して統一した見解を持つというより、むしろ各メンバーの自由なアプローチが尊重されている。しかし、いずれの章も、本書が専門書であると同時になるべく多くの人々に読まれることを目指しているため、理論的な部分については難解な分析を避け、できるだけ平易な言葉で表現されるように配慮されている。また本書の課題について各国の経験が一通り理解できるよう、各国を分析した諸章ではそれぞれ最低限必要な重要課題や歴史的事実に言及されるように試みられている。第4章以下の各章に各国のクロノロジーが付けられているのもこのためである。

本書の構成は、第1章、第2章、第3章がいわば総論にあたり、第4章から第8章は各論に相当する。第1章「序章」では、本書の課題についてのイントロダクションがなされ、ラテンアメリカのインフレーションと安定化政策の基本的問題を簡潔に知ることができる。第2章「インフレーションのメカニズム」、第3章「インフレ安定化政策の諸問題」は、これらの課題の理論的な解説部分である。以下の各国の分析を理解するのに役立つはずである。第4章「アルゼンチンの経済安定化政策——インフレーションと経済停滞の15年——」は、階級対立の結果としてのインフレーションがゲーム理論を用いて分析されており、この点がユニークである。第5章「ブラジルのマクロ経済問題とバイタリティ」は、ブラジルの著名な経済学者の論文であり、本書の課題の優れた分析のみならず、所得分配や産業レベルの問題にも言及されている。第6章「ボリビアのハイパー・インフレーションと経済安定化政策」は、この問題について、ボリビアに関するおそらく日本で最初の本格的論文であり、ボリビアのハイパー・インフレの発生と収束のメカニズムが詳しく論じられている。第7章「チリのインフレーションと経済安定化政策」は、インフレーションを抑制した事例として、軍事政権下の市場メカニズム指向的な安定化政策について詳細な資料・データを用いて検証した手堅い論文である。第8章「メキシコの経済安定化政策——1983～85年のIMF経済調

整プログラムを中心に——」は、テーマは限定されているが、著者の理論モデルを背景に副題の IMF の調整プログラムの批判的分析がなされている点に興味深い。

本書出版にあたっては多くの人々に謝意を表さなければならない。研究会メンバーの熱心な討論はもとより、オブザーバーの諸氏、柳原透氏(アジア経済研究所)の援助を得たことに感謝したい。また、研究会期間中にアジア経済研究所から主査と幹事に対し7月から8月にかけての現地調査(アルゼンチン、ブラジル、チリ、ボリビア)の機会を与えられたが、訪問国で多くの協力を得た。とくに、サンパウロ大学経済学部長のロベルト・マセド(Roberto Macedo)教授からは、サンパウロでの現地調査に格別の配慮を得たうえに、本書の一つの章を担当して頂いた。編者に対する長年にわたる指導とともに、感謝したい。

この他、4カ国の現地調査では以下の人々の協力を頂いた。本書の刊行のためになんらかの関わりをもったこれらの人々に感謝する意味で、あえてスペースをさいてその名前を掲載させて頂く。なお、敬称、所属は省略し、順不同である。

チリ：Ricardo Ffrench-Davis, Joseph Ramos, Andrés Bianchi, Francisco Garces, Francisco Ramirez, Sergio de la Cuadra, Patricia Larrain, Pablo Piñera Echenique, José L. Daza, 西園明正, 桑山幹夫, 吉村維弘, 水野浩二, 岡田多喜男, 原田光博, 西岡雄司, 田辺利男

ボリビア：Juan Antonio Morales, Gonzalo Afcha de La Parra, Jorge Omoya Benitez.

アルゼンチン：Daniel Heymann, Alfredo Canavese, Bernardo Kosacoff, Alberto Muller, Shohan Sakugawa, Emilio Sawada, 宇佐見耕一, 八柳修之, 粕谷典行, 小林晋一郎, 四十物惣起雄, 藤井正夫

ブラジル：Gilson Schwartz, Antonio Kandir, Luiz C. Bresser Pereira,

Yoshiaki Nakano, Carlos Antonio Luque, Luiz Martins Lopes,
Eurico Ueda, Mauricio Barata de Paula Pinto, Akihiro Ikeda,
Maria da Conceição Tavares, Adhemar Mineiro, Masato Ninomiya,
花田好二, 坂口孟, 三浦清司, 田中信, 東田直彦, 萩原進, 矢島浩一

日本におけるラテンアメリカ研究のなかでも、とりわけインフレーションに関する研究は著しく立ち遅れている。未熟な編者が本書を刊行するにはいささかの躊躇があったが、以上のような多くの人々の助力によって、どうにか所期の目的を達成し、一つの研究成果として出版できることになった。日本におけるこの分野でのワン・ステップとなることを願っている。しかし、不備な点や残された課題は多い。読者からのご批判を頂ければ幸いである。

1990年3月15日

(ブラジル・コロール大統領就任の日に)

編 者